

十勝岳の火山活動解説資料（令和8年9月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

令和8年9月12日09時30分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げました。その後、警報事項に変更はありません。

8月7日以降、噴火は観測されていません。

62-2火口付近では、ここ数年にわたり噴煙・噴気が多く、高感度の監視カメラで発光現象が時々観測されるなど、活発な熱活動が続いています。3月以降、山体付近のやや深部の膨張を示す地殻変動が継続する中、62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加、62-2火口付近の熱活動のさらなる高まりが観測され、7月下旬から8月上旬にかけては62-2火口付近からごく小規模な噴火が複数回発生しています。

このような中、8月中旬から9月中旬にかけては、山体付近を震源とする振幅の大きな火山性地震の増加がみられ、火山活動がより高まった状態となっています。

62-2火口から概ね3kmの範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

○活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1-①～⑤、図2-①～③、図3-①～③、図4～9、図11、表1）

8月7日以降、噴火は観測されていません。

監視カメラによる観測では、62-2火口の噴煙が2021年頃から高い状態で経過しており、5月以降は噴煙がさらに高く上がる日が時折みられています。今期間、62-2火口の噴煙の高さは最高で火口縁上700mまで上がりました。隣接する振子沢噴気孔群でも活発な噴気活動が続いており、今期間、噴煙の高さは最高で稜線上400mまで上がりました。大正火口の噴気の高さは200m以下で経過しました。

62-2火口付近では、4月以降、夜間に高感度の監視カメラで発光現象（火映を含む）がしばしば観測されており、今期間も度々観測されました。この現象は、62-2火口付近での高温の火山ガス噴出や硫黄の燃焼等によるものと考えられます。

25日に国土交通省北海道開発局の協力により実施した上空からの観測では、引き続き62-2火口及び振子沢噴気孔群での活発な噴煙・噴気活動が認められました。また、振子沢噴気孔群において引き続き地表面温度が高い状態であることを確認しました。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータ及び機動的な調査観測・解析グループ（国立研究開発法人防災科学技術研究所・東京大学）の観測・解析結果を利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和8年10月分）は令和8年11月10日に発表する予定です。

・火山ガスの状況（図2-④、図3-④）

25日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）放出量は1日あたり700トンでした。3月以前と比べて依然として多い状態が継続していますが、8月以降更なる増加は認められていません。

・地震及び微動の発生状況（図1-⑥～⑩、図2-⑤～⑦、図3-⑤～⑦、図10）

火山性地震は多い状態で経過しました。震源は主に62-2火口付近のごく浅い所、グラウンド火口付近及び旧噴火口付近のごく浅い所～深さ1km付近に分布しました。4月以降、62-2火口付近及びその周辺の地震活動がやや高まって推移しています。このような中、山体付近を震源とする振幅の大きな火山性地震（山麓の硫黄沢観測点で最大振幅 $2\mu\text{m}$ 以上）が12日に2回発生し、8月中旬から9月中旬にかけての前30日間の積算回数が5回（噴火警戒レベル3引上げ基準）となりました。このうち最も規模が大きかったのは、9月12日08時20分頃に発生した火山性地震で、マグニチュードは1.8でした。なお、この後、山体付近を震源とする振幅の大きな火山性地震の発生はありませんでした。

火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図2-⑧、図12～13）

GNSS連続観測では、2021年以降、62-2火口付近の観測点を中心に山体浅部の収縮傾向を示す地殻変動が観測されていましたが、2022年以降次第に鈍化し、2024年秋以降は特段の変化は認められていません。一方、山体を挟む一部の基線では、2026年3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸びが認められています。6月頃からは伸びが鈍化していますが、現在も継続しています。

また、国土地理院によるGNSS連続観測及びその解析によると、「美瑛（国）」－「新得（国）」等の山体を挟む長い基線でも2026年3月末頃からわずかな伸びが見られています。

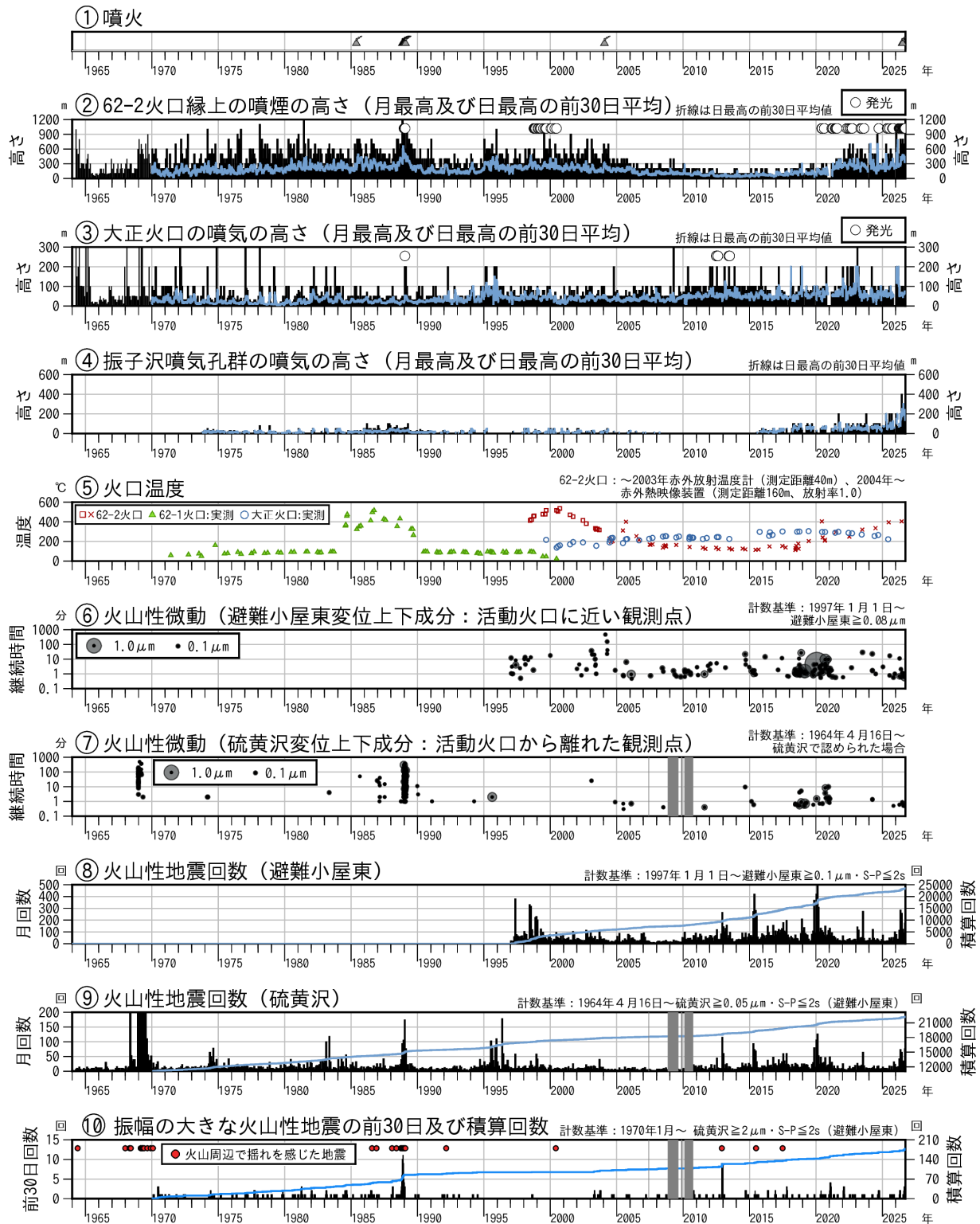


図1 十勝岳 火山活動経過図（1964年1月～2026年9月）

②の発光を示すプロットは、目視や監視カメラ等で62-2火口付近（62-2火口内及びその近傍、振子沢噴気孔群も含みます）で発光が観測された日を示します。

⑤の62-2火口及び大正火口の温度は、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び国立研究開発法人産業技術総合研究所のデータを含みます。

⑦⑨⑩の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

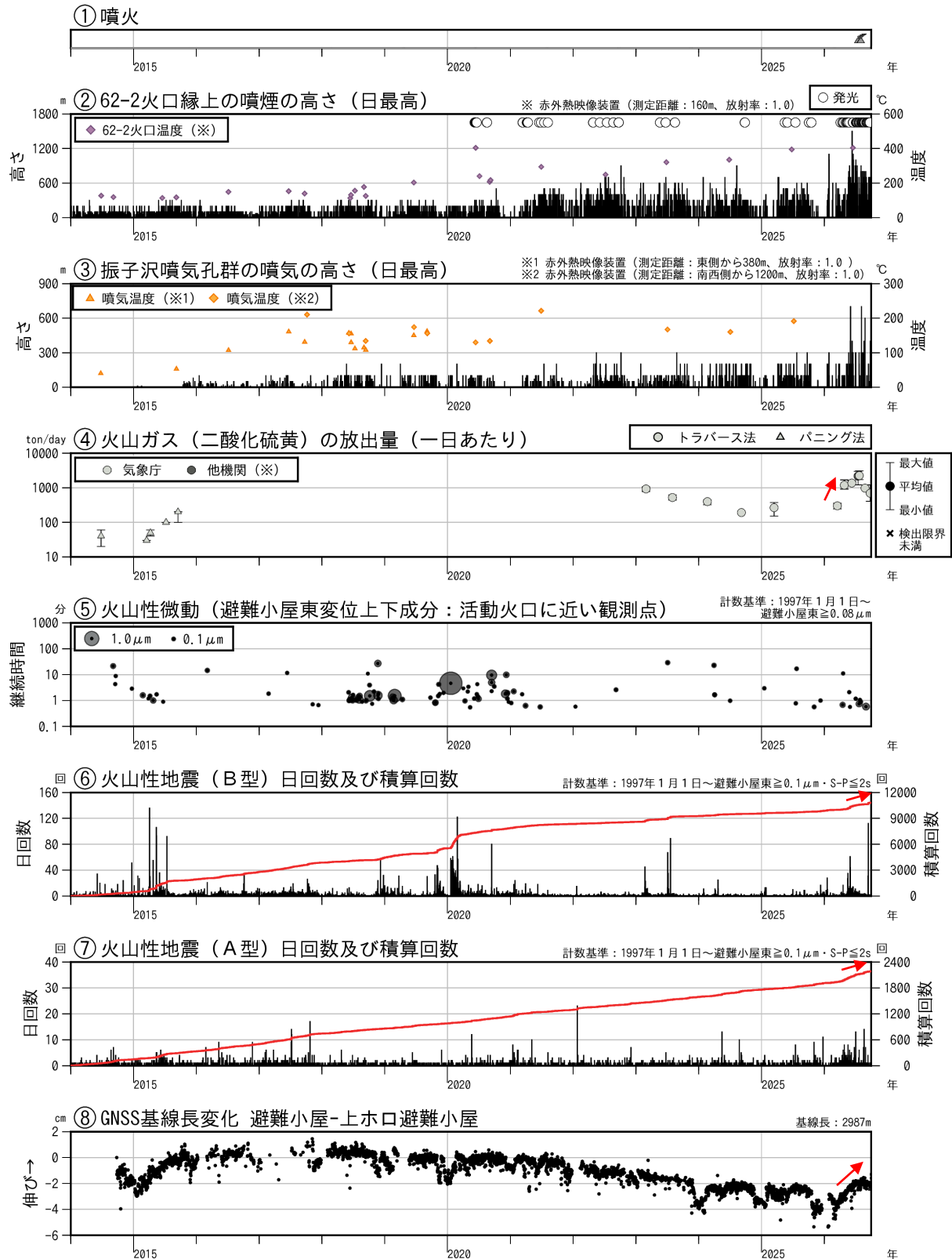


図2 十勝岳 火山活動経過図（2014年1月～2026年9月）

④他機関（※）は機動的な調査観測・解析グループ（防災科学技術研究所・東京大学）及び北海道大学の観測を示します。

⑥は主に 62-2 火口付近のごく浅い所（図 10 参照）で発生したと推定される B 型地震の回数、

⑦は主にその周辺で発生したと推定される A 型地震の回数を示します。また、赤折れ線はそれぞれの積算回数を示します。

⑧は観測点配置図（図 13）の基線④に対応しています。

- ・ 3 月以降、山体付近のやや深部の膨張を示す GNSS 基線の伸び（⑧）が認められ、4 月以降は、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加（④）、62-2 火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化（⑥⑦）が認められています（赤矢印）。

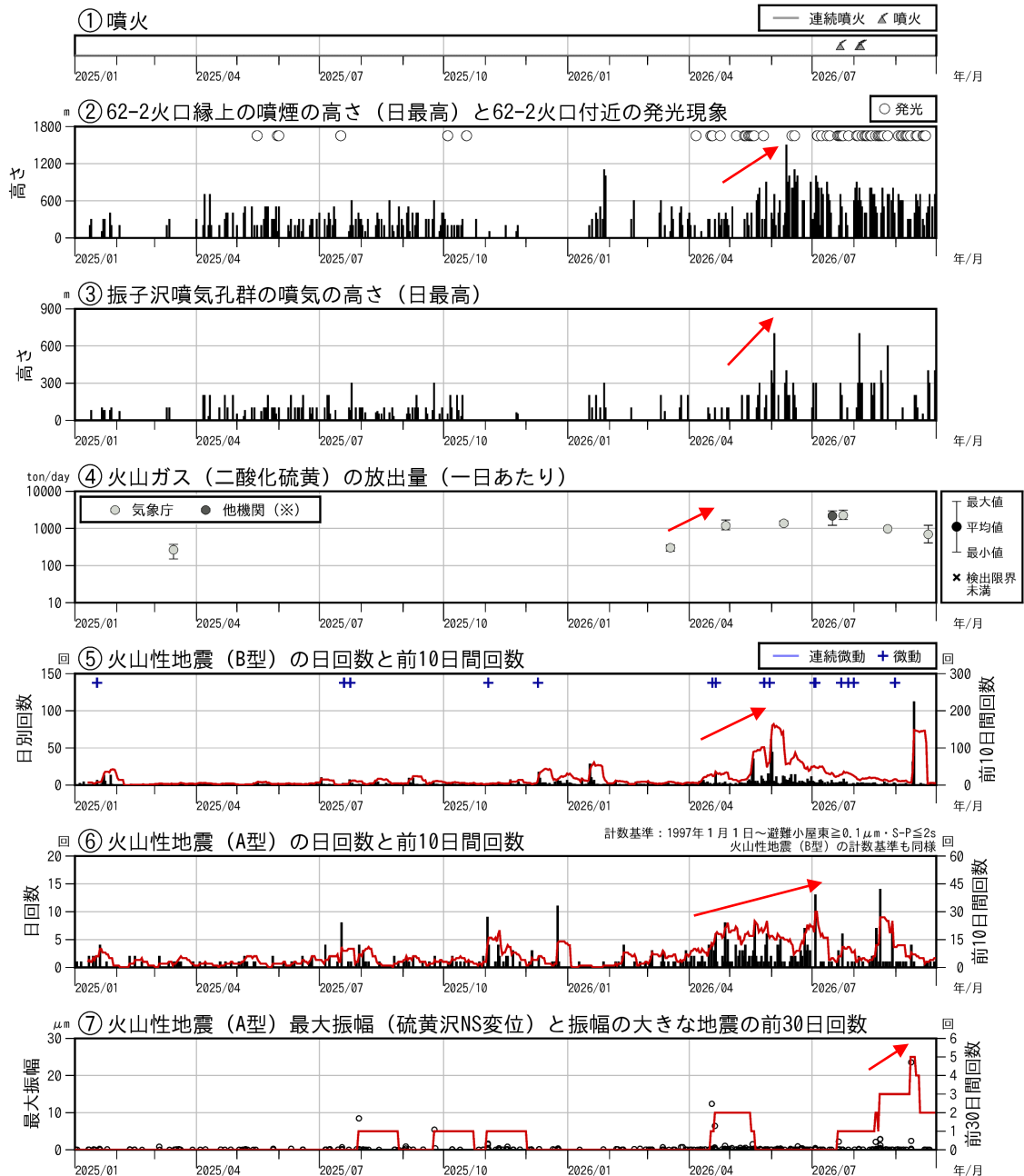


図3 十勝岳 火山活動経過図（2025年1月～2026年9月）

②の発光を示すプロットは、監視カメラで62-2火口付近（62-2火口内及びその近傍、振子沢噴気孔群も含みます）で発光が観測された日を示します。

④他機関（※）は機動的な調査観測・解析グループ（防災科学技術研究所・東京大学）及び北海道大学の観測を示します。

⑤は主に62-2火口付近のごく浅い所（図10参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、

⑥は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。また、赤折れ線はそれぞれの前10日間の積算回数を示します。

⑦の赤折れ線は振幅の大きな火山性地震（山麓の硫黄沢観測点で最大振幅2μm以上）の前30日間の積算回数を示します。

- ・25日に気象庁が実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）放出量は1日あたり700トンでした。
- ・4月以降、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加（④）、62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化（⑤⑥）が認められています（赤矢印）。また、62-2火口や振子沢噴気孔群付近の噴煙・噴気の高さもより高まり（赤矢印）、その後も高い状態が続いています（②③）。
- ・山体付近を震源とする振幅の大きな火山性地震が12日に2回発生し、8月中旬から9月中旬にかけての前30日間積算回数が5回（噴火警戒レベル3引上げ基準）となりました（赤矢印）。なお、この後、山体付近を震源とする振幅の大きな火山性地震の発生はありませんでした。



図4 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況（白金模範牧場監視カメラによる）及び火口周辺図

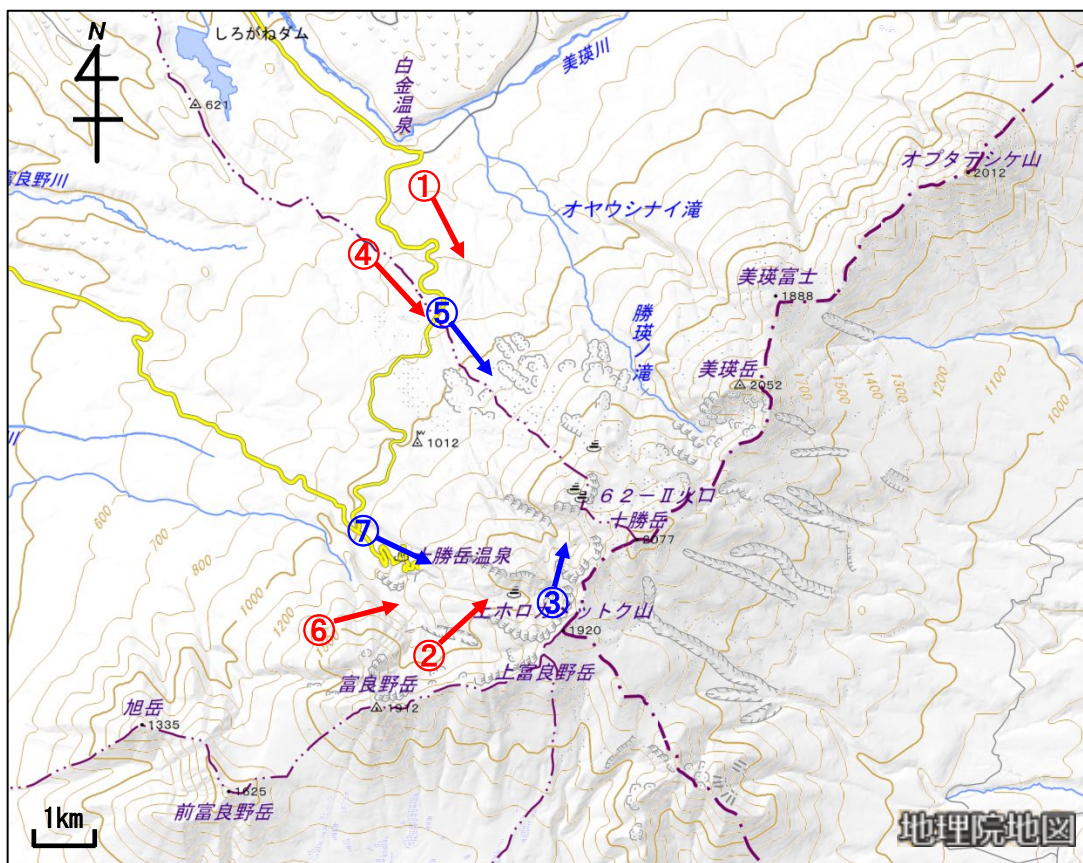


図5 十勝岳 写真及び赤外熱画像の撮影方向（矢印）



図6 十勝岳 火口周辺の状況 北西側上空（図5の①）から撮影
・62-2火口及び振子沢噴気孔群では、引き続き活発な噴煙・噴気活動が認められました。

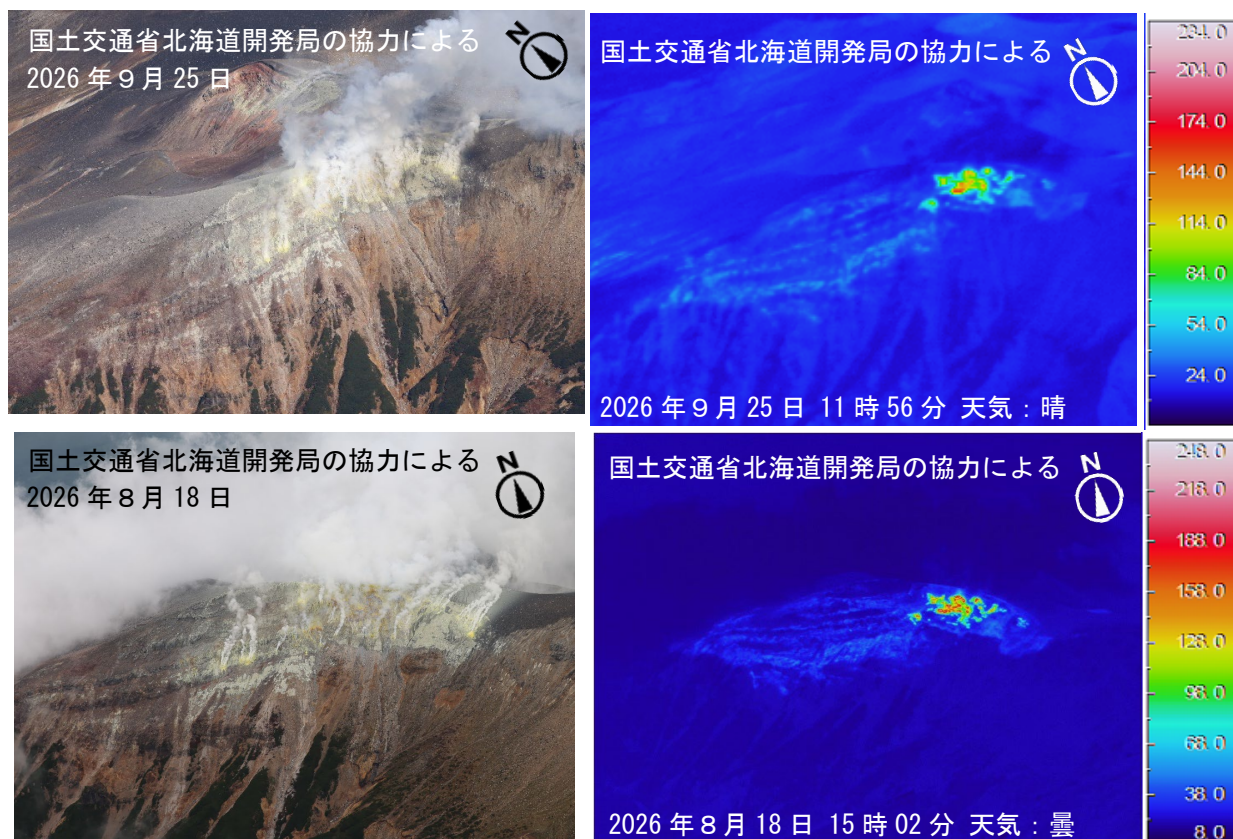


図7 十勝岳 赤外熱映像装置による振子沢噴気孔群の地表面温度分布
上：南西側上空（図5の②）から撮影 下：南側上空（図5の③）から撮影
・振子沢噴気孔群において引き続き地表面温度が高い状態であることを確認しました。

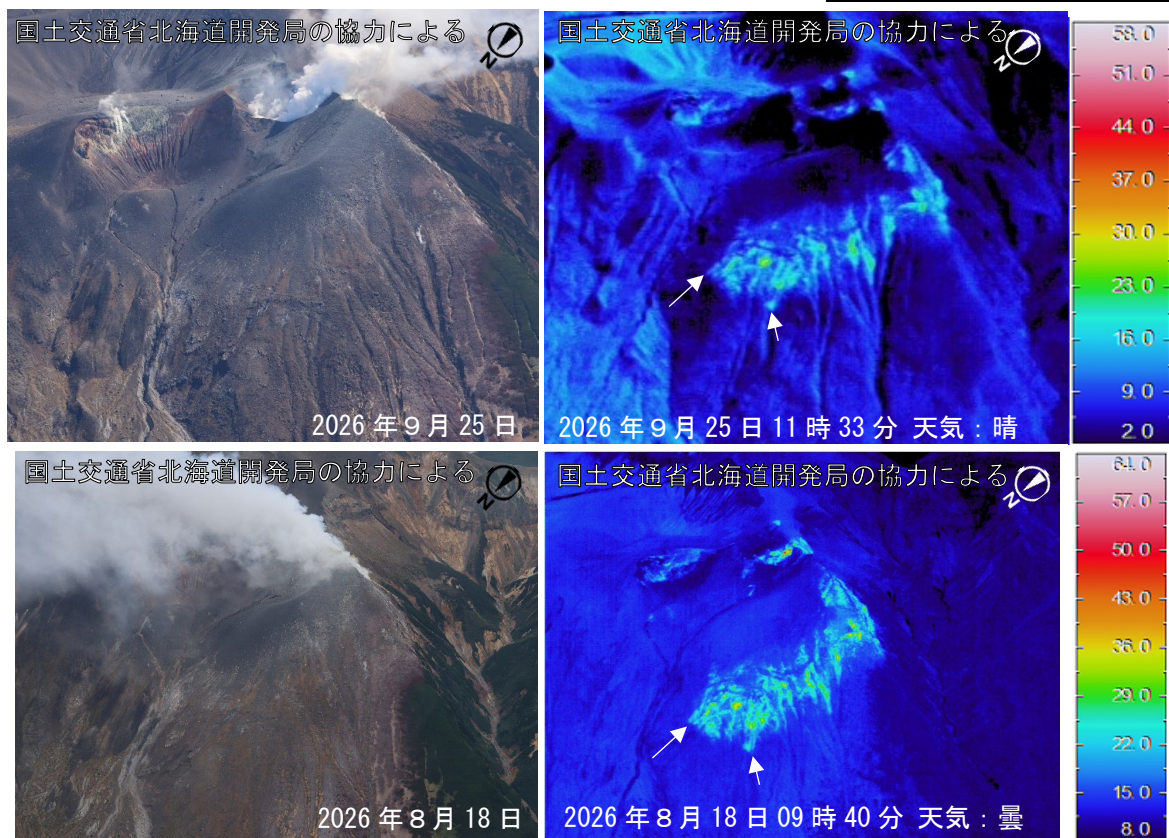


図8 十勝岳 赤外熱映像装置による前十勝北西側斜面の地表面温度分布

上：北西側上空（図5の④）から撮影 下：北西側上空（図5の⑤）から撮影
 図中の白矢印は同じ場所を示す

・前回（8月18日）の観測と比べて、特段の変化は認められませんでした。

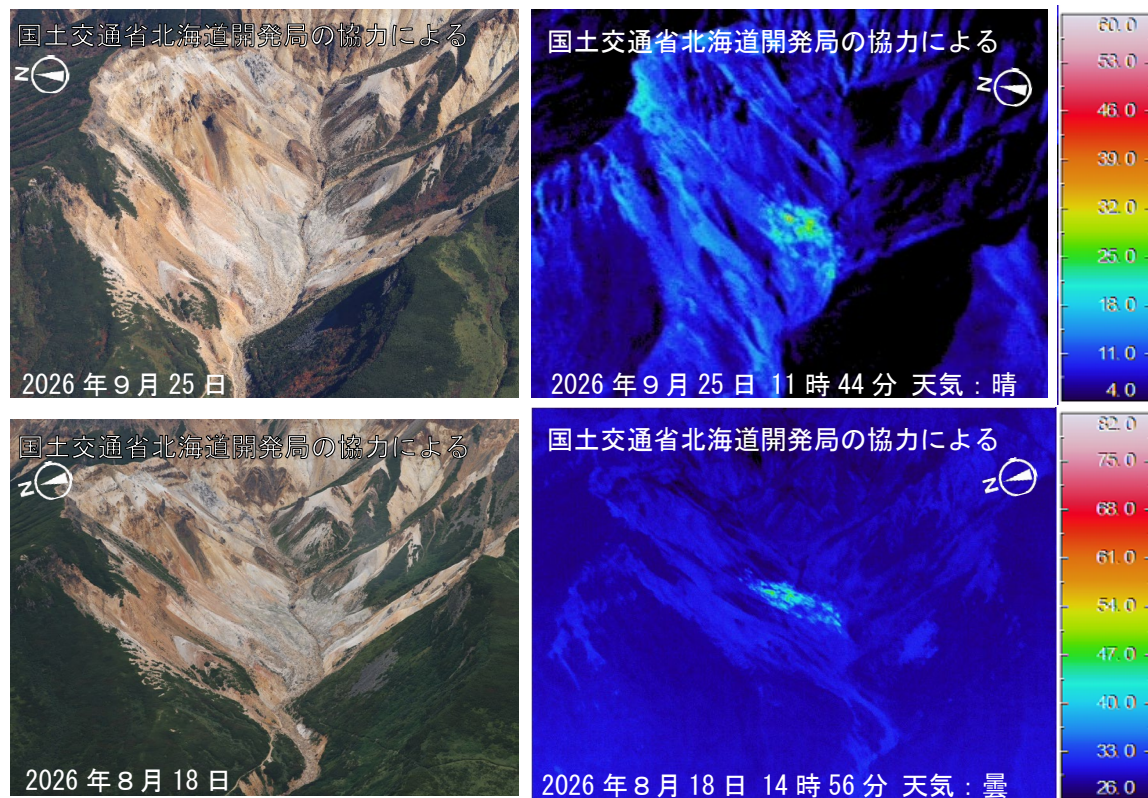


図9 十勝岳 赤外熱映像装置による旧噴火口の地表面温度分布

上：西側上空（図5の⑥）から撮影 下：西側上空（図5の⑦）から撮影

・前回（8月18日）の観測と比べて、特段の変化は認められませんでした。

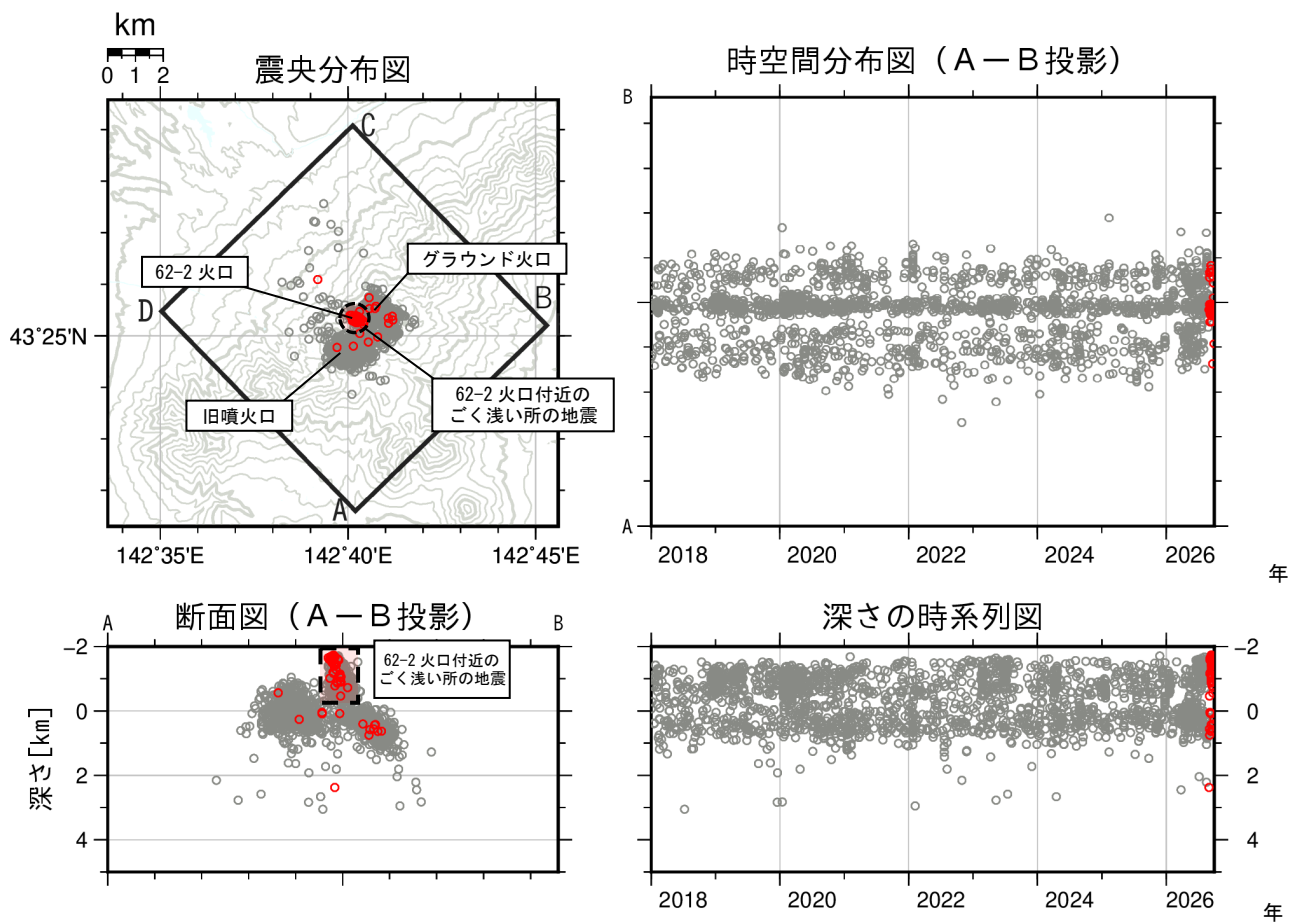


図10 十勝岳 火山性地震の震源分布（2018年1月～2026年9月）

○：2018年1月～2026年8月の震源 ○：2026年9月の震源



図 11 十勝岳 62-2 火口付近で観測された発光現象（火映）
16日に観測された火映（白金模範牧場監視カメラによる）

表 1 十勝岳 2026 年 9 月に観測された 62-2 火口付近の発光現象（高感度の監視カメラによる）

※ 1：発光現象により火口上の雲や噴煙が明るく照らされた現象を観測した場合には、火映として表記しています。

※ 2：強度 0 は肉眼では確認できず監視カメラ（高感度カメラ）によってのみ確認できる程度の火映・発光現象、強度 1 は肉眼でようやく認められる程度の火映・発光現象を示します。

62-2 火口付近とは、62-2 火口内及びその近傍を示し、振子沢噴気孔群も含む領域を示しています。

観測日	発光現象※ ¹	発光現象の強度、発生状況
3 日夜	火映	強度 0
5 日夜～6 日未明	火映	強度 0、断続的
8 日未明～明け方	火映	強度 0、断続的
9 日夜～10 日明け方	火映	強度 0、断続的
12 日未明～明け方	火映	強度 0、断続的
12 日夜	火映	強度 0、断続的
16 日夜	火映	強度 0
17 日夜	火映	強度 0、断続的
21 日夜～22 日明け方	火映	強度 0、断続的
23 日未明～明け方	火映	強度 0、断続的

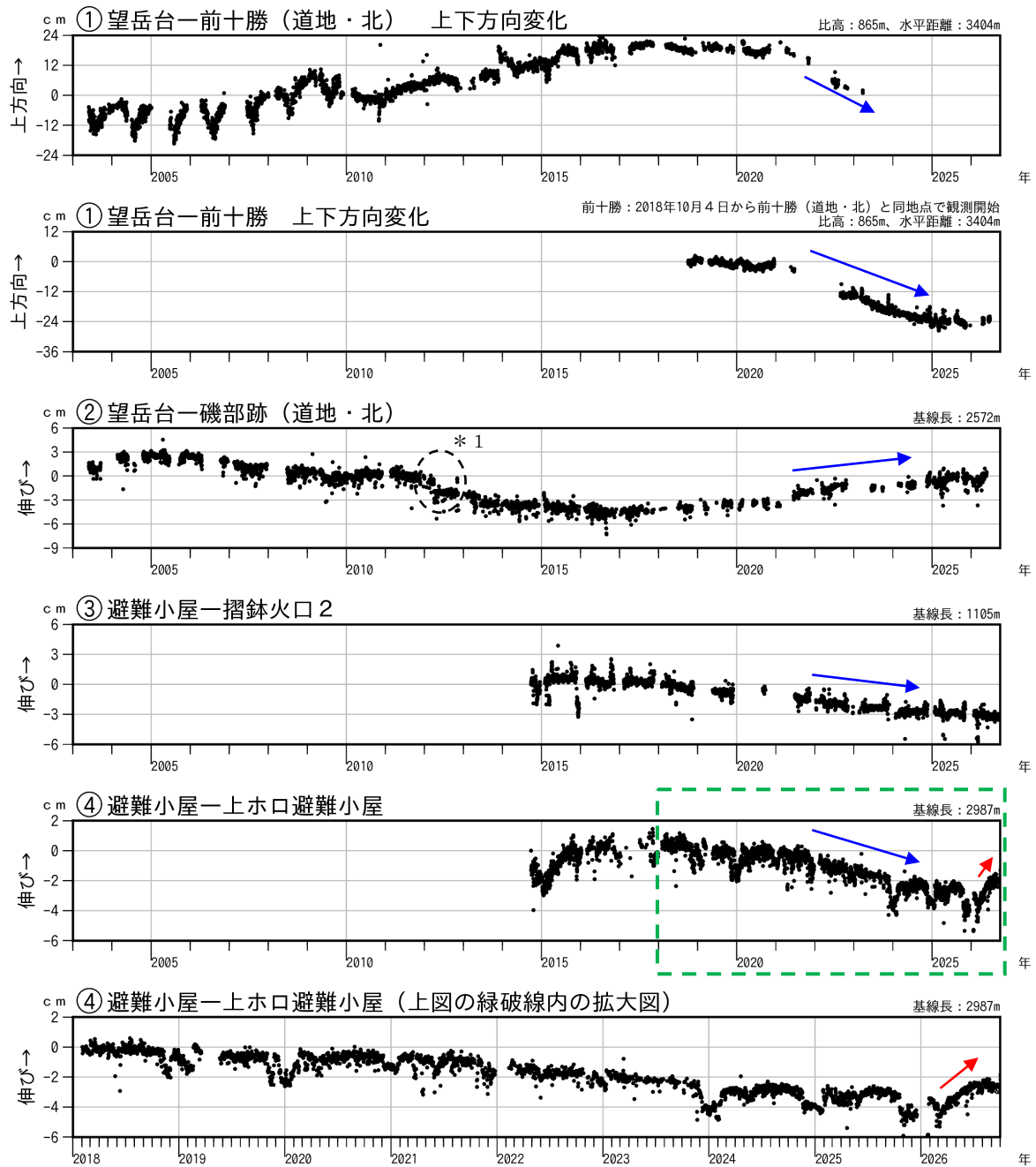


図12-1 十勝岳 GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化（2003年5月～2026年9月）

グラフ①～④は観測点配置図（図13）の基線①～④に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります。

2010年3月の前後で解析方法が異なります。

白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

* 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。

- 基線①～④では2021年頃から山体浅部の収縮を示すと考えられる基線長の変化及び沈降（青矢印）が観測されていましたが、2022年頃からやや鈍化し、2024年秋以降は特段の変化は認められません。ただし、62-2火口のごく近傍の観測点を含む基線①では、観測点付近の局所的な変形の影響も受けていると考えられます。
- 基線④では2026年3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸びの変化（赤矢印）が認められており、6月頃から鈍化しつつも継続しています。

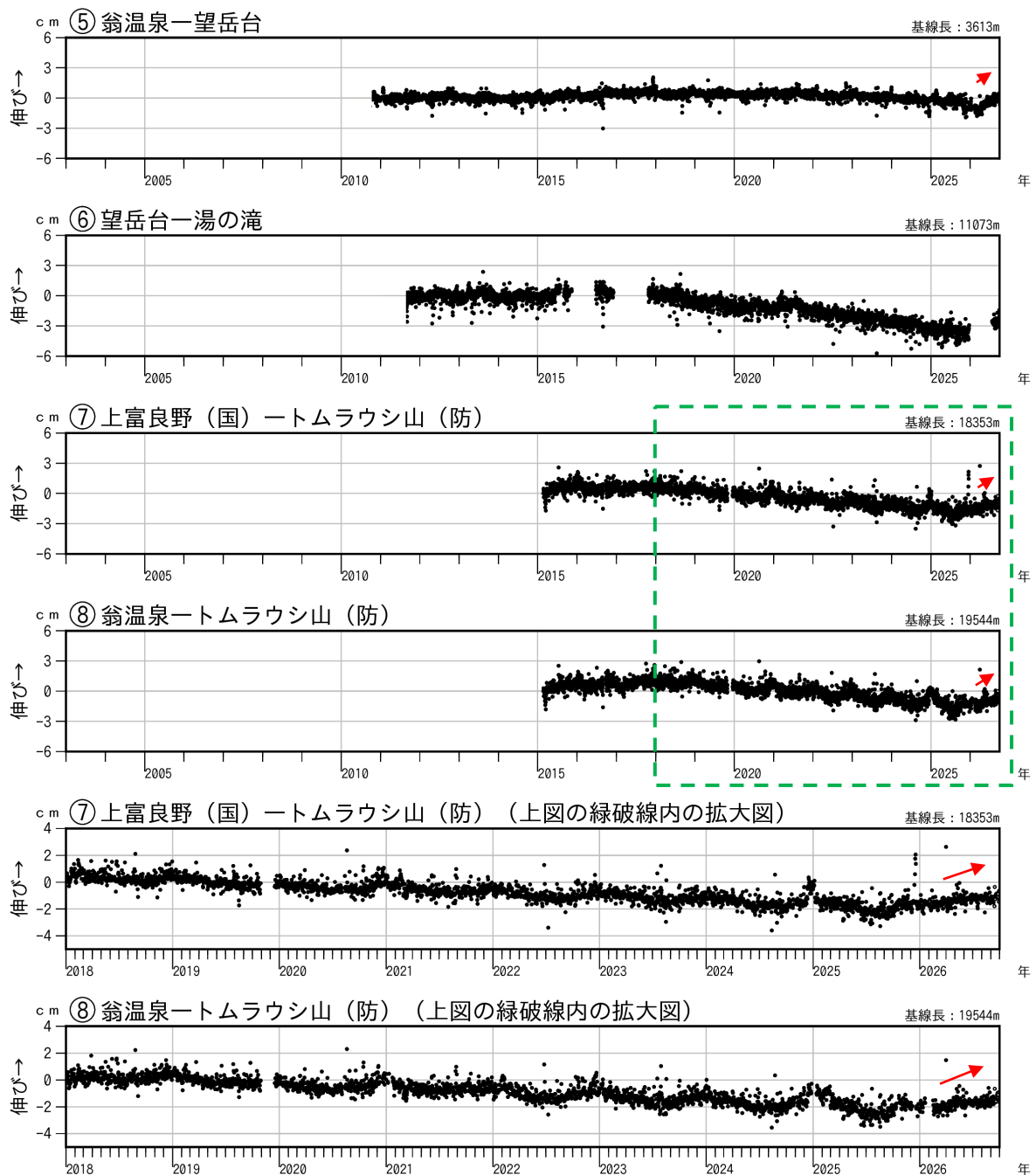


図12-2 十勝岳 GNSS連続観測による基線長変化（2003年5月～2026年9月）

グラフ⑤～⑧は観測点配置図（図13）の基線⑤～⑧に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。

白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

- ・ 基線⑦⑧では、2018年以降ごくわずかな短縮傾向が続いていましたが、2026年3月頃からは基線⑤⑦⑧で伸長※（赤矢印）が認められており、6月頃から鈍化しつつも継続しています。これらの基線の伸びは、山体付近のやや深部の膨張を示していると考えられます。

※例年8月頃から12月頃には同程度の伸びが認められますが、これは大気の状態変化の影響によるみかけ上の変化と考えられます。2026年3月頃からは、これらとは異なる伸びが認められています。

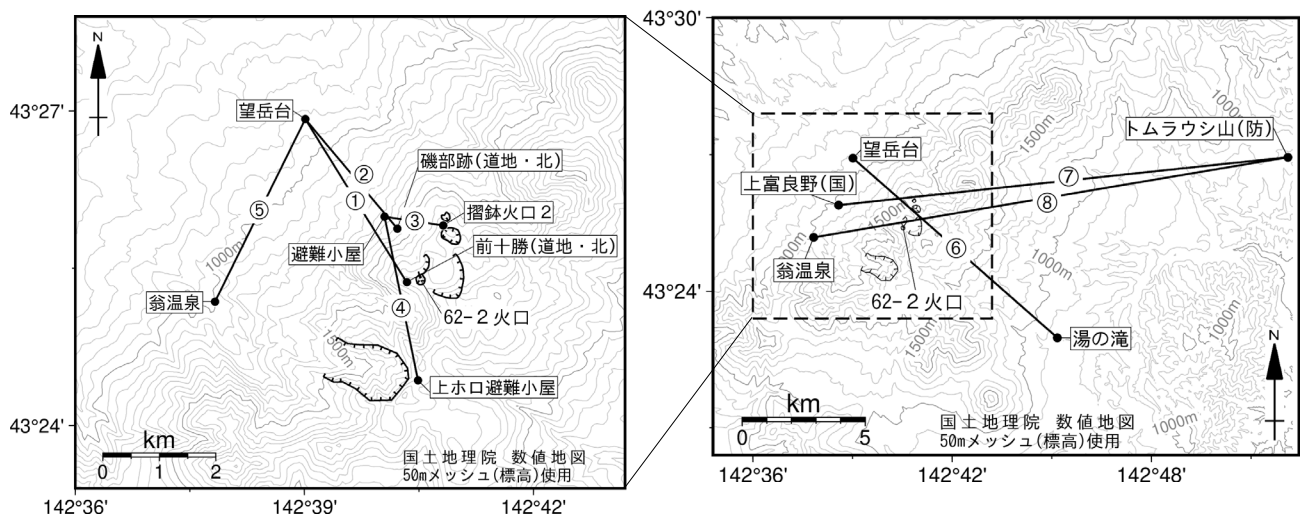
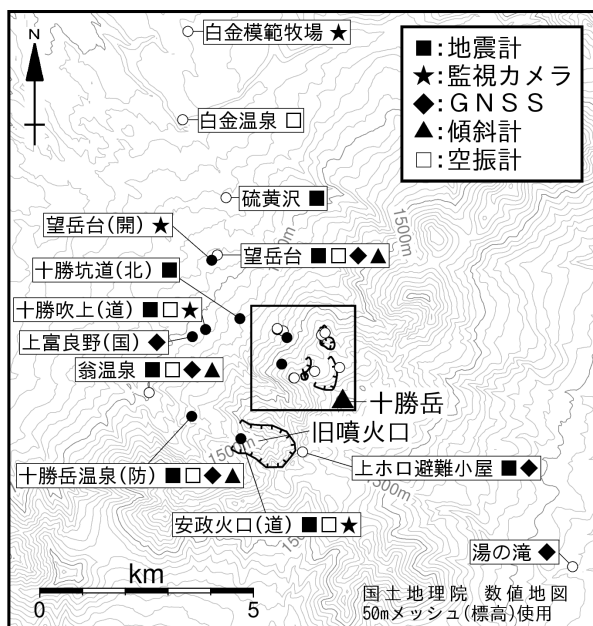


図13 十勝岳 GNSS連続観測 観測点配置図

図中の基線④は図2のグラフ⑧に対応しています。
図中の基線①～⑧は図12のグラフ①～⑧に対応しています。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。
(開):国土交通省北海道開発局、(国):国土地理院、(北):北海道大学、(防):国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道):北海道、
(道地):地方独立行政法人北海道立総合研究気候エネルギー・環境・地質研究所

図14 十勝岳 観測点配置図